

# 『源氏物語』 夕顔卷の「家鳩」——〈回想〉の仕掛け——

高橋早苗

はじめに

『源氏物語』夕顔卷では、光源氏が夕顔の女君と恋に落ち、彼女と死別するという出来事が語られる。その巻末近くにおいて、光源氏は夕顔の侍女右近と、今は亡き夕顔について語らう時を持つ。彼女の死から一月半が過ぎたある夕べであった。

竹の中に家鳩といふ鳥のふつつかに鳴くを聞きたまひて、かのありし院にこの鳥の鳴きしをいと恐ろしと思ひたりしさまの面影にらうたく思ほし出でらるれば、「年齢は幾つにかものしたまひし。あやしく世の人に似ず、あえかに見えたまひしも、かく長かるまじくてなりけり」とのたまふ。 (夕顔①一八七頁)<sup>1</sup>

光源氏に問われるままに、右近が夕顔の素性を語ったあと、二人はしばし黙り込む。そのとき、光源氏の耳に届いたのが、「竹の中に家鳩といふ鳥のふつつかに鳴く」声であった。「ふつつかに」とは他の場面では咳き込みがちな老女の声の形容としても用いられる<sup>2</sup>、「太く不細工な声」である<sup>3</sup>。光源氏はこの鳴き声をきっかけとして、「かのありし院にこの鳥の鳴きしをいと恐ろしと思ひたりしさまの面影にらうたく思ほし出でらるれば」

と、「なにがしの院」で怯える「らうたく」愛らしかった夕顔の姿を思い起こし、そんな彼女の実年齢を知るべく再び右近に問いかける。夕顔哀悼の意味を持つ右の場面において、「家鳩」の出来事を思い起こす光源氏の意識が、あくまで彼を魅了した夕顔の追慕へと向かうのは当然である。よって物語はそのまま哀惜の情を漂わせつつ展開していくのだが、ここで注目したいのは、あの事件の日、「なにがしの院」には「家鳩といふ鳥」がおり、夕顔を怯えさせたという光源氏の回想の内容である。というのも、あの日の夕顔は、「もの恐ろしうすごげに思ひたれば」（同一六〇頁）、「物をいと恐ろしと思ひたるさま」（同一六三頁）とあるように、始終何かに怯える様子を見せていたが、その際、「家鳩」に関する記述は一切見られなかったからである。光源氏の回想において初めて明らかにされた「家鳩」のエピソードは、何らかの意味を持っていたのではないだろうか。平安文学史における「鳩」のイメージを探ることを通して、この〈回想〉が、夕顔との恋物語をしめくくるにあたり、ある機能を果たしていた可能性を指摘したい。

### 一、夕顔巻の「家鳩」

光源氏が夕顔をいざなった「なにがしの院」は、次に示すようにひどく荒廃しており、そこで彼は夕顔の命を奪われるという恐ろしい体験をする。

・ 荒れたる門の忍ぶ草茂りて見上げられたる、たとしへなく木暗し。(略)  
女恥ぢらひて、

「山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ

心細く」とて、もの恐ろしうすごげに思ひたれば、かのさし集ひたる住まひの心ならひならんとをかしく思す。  
(同一五九～一六〇頁)

・いといたく荒れて、人目もなくはるばると見たたされて、木立いと疎ましくもの古りたり。け近き草木などはことに見どころなく、みな秋の野にて、池も水草に埋もれたれば、いとけ疎げになりける所かな。

(同一六一頁)

・たとしへなく静かなる夕の空をながめたまひて、奥の方は暗うものむつかしと、女は思ひたれば、端の簾を上げて添ひ臥したまへり。(略)つと御かたはらに添ひ暮らして、物をいと恐ろしと思ひたるさま若う心苦し。  
(同一六三頁)

荒れ果てた邸のなかで、夕顔は「もの恐ろしうすごげに思ひたれば」、「物をいと恐ろしと思ひたるさま」と何かに怯える様子を見せるが、具体的な何かは示されておらず、むしろ「家鳩」の鳴き声への言及もない。恐怖におののく夕顔を見ても光源氏は意に介さず、それどころかそんな彼女を「をかしく」思い、若さを感じている。その夜、夕顔は取り殺されてしまうのであり、音の描写はむしろこの夜に多彩に見出せることに注目したい。<sup>4</sup>

①手を叩きたまへば、山彦の答ふる声いと疎まし。  
(同一六四頁)

②「我人を起こさむ。手叩けば山彦の答ふる、いとうるさし。(下略)」  
(同一六五頁)

③このかう申す者は、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち鳴らして、「火危し」と言ふ言ふ、預りが曹司の方に去ぬなり。  
(同一六六～一六七頁)

④泣きまどふさまいといみじ。南殿の鬼のなにがしの大臣おびやかしける例を思し出でて、(略)「夜の声はおどろおどろし。あなかま」と諫めたまひて(下略)。(同一六七～一六八頁)

⑤夜半も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く聞こえて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおほゆ。(同一六八頁)

⑥物の足音ひしひしと踏みならしつづ背後より寄り来る心地す。(同一六九頁)

何者かに襲われたことを感じた光源氏は、目を覚まし、灯火もすべて消えていることから控えの者を呼び寄せようと手を叩く。その音は夜の邸に響き、それに反響する①②「山彦の声」は「いと疎まし」きほどである。その不気味さ、また人気のなさもあり、光源氏はやってきた院の「預り」(番人)の子に、魔除けのために弦打と声づくりを命じる。③では紙燭を取りに行く「預り」の若者が遠ざかるとともに、彼が鳴らす弓の弦の音と、「火危うし」という呼びかけの声も遠のいていく様子が語られる。それと入れ替わるようにして、④右近の激しい泣き声は真夜中の邸に響きわたり、さらには⑤荒々しい風、松風の音、そして梟の「から声」しわがれた声までもが耳に届いてくる。光源氏は⑥背後より何者かの「足音」が「ひしひしと」忍びよるかのような錯覚まで抱くようになる。つまるところ、描写された音の多くが光源氏の恐怖心をあおると同時に、彼だけでなく読者にも邸に潜む様々な物の存在を予感させる働きを担っていると言えるだろう。随所にちりばめられた音の描写は、魔屋の怪異を効果的に演出するのである。

しかし、先に挙げたように光源氏がのちに「なにがしの院」での出来事を振り返る際、その思い出は音に関わるものでありながら、詳細に記された①～⑥のいずれでもないことを見逃してはならないだろう。その場面を再掲する。

竹の中に家鳩といふ鳥のふつつかに鳴くを聞きたまひて、かのありし院にこの鳥の鳴きしをいと恐ろしと思ひたりしさまの面影にらうたく思ほし出でらるれば、「年齢は幾つにかものしたまひし。あやしく世の人に似ず、あえかに見えたまひしも、かく長かるまじくてなりけり」とのたまふ。  
(同一八七頁)

夕顔を失つてのち自分自身も病床に臥せていた光源氏にとって、右近との対話は、夕顔の死後初めて彼女について語らい思いを馳せる時間であったと言える。そんななか光源氏の耳に届いた「家鳩」の鳴き声は、「かのありし院」で「この鳥の鳴きしをいと恐ろしと思」つていた夕顔を彼に思い起こさせる。その「らうたく」愛らしかった様子に、改めて強い追慕の情を抱く光源氏の姿が描出されていくのだが、先に述べたように「家鳩」のエピソードは、読者に見れば初めて提示される内容であった。夕顔を何者かが襲つた後「なにがしの院」には①⑥のように多彩な音の描写が見られたのだが、ここで示されるのは、その際光源氏をおびやかしたどの事柄でもない。この唐突な〈回想〉において「家鳩」は、あくまで事件前に夕顔のみがおびえており、光源氏は一切頓着していなかったものとして語られている点に目をとどめておきたい。

では、こうした光源氏の〈回想〉は、これまでの注釈においてどのように受け止められてきたのだろうか。

⑦『河海抄』

鳩イヘバト。和名云、伊倍八止イヘバト。本草云、頸短ク灰色也。

⑧『細流抄』

ありし院とは河原院也。此河原院には終日居給ひし程に、鳩ハトの啼く事もあるべき也。それを思し出すなるべし。

⑨『新編日本古典文学全集』(①一八七頁、頭注一六)

院での記述には、梟の鳴き声はあったが、家鳩のことは記されていない。昼間その鳴き声があったのである。う。

⑩『新日本古典文学大系』(①一四〇頁、脚注六)

家鳩の声におびえたとは書かれていなかったから、ここでの描写の付加である。

⑦『河海抄』は「家鳩」がどのような鳥であるか触れるのみで、⑧『細流抄』では「終日居給ひし程に、鴿ハトの啼く事もあるべき也。それを思し出すなるべし」と、補足のような形で記すにとどまっている。⑨『新編日本古典文学全集』頭注では、梟の記述が夜の場面であったことから、家鳩のエピソードは昼間だったのだろうと推測している。確かに⑤で見たとように、あの夜「気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおぼゆ」と、しわがれた鳥の鳴き声に耳をとめて「梟とはこれをいうのだ」と思う光源氏の姿が描かれていた。よって「梟」は夜、「家鳩」は昼と判断することもできようが、この点については「梟」と「家鳩」は同一の鳥であったと合理的に解釈することもあるいは可能だろう。もちろん〈回想〉の箇所における諸本の異同はなく、全て「家鳩」と記されているため誤記ということは考えられないが、光源氏が「梟はこれにや」と認識した鳥は実は「家鳩」であったと捉えれば、事件の夜に「家鳩」の記述がないことに対する一応の解決は見られるように思われる。だが、ではなぜ「家鳩」に置き換えられたのか、「家鳩」のエピソードの提示にはどのような意味があるのかという問題はいぜん残されたままである。⑩新日本古典文学大系の指摘するように、「家鳩」の挿話が「ここでの描写の付加」であるとしたら、なぜ、何のために付加されたのだろうか。

そもそも、今でこそ平和の象徴として捉えられることの多い「鳩」は、当時どのようなイメージを付される

ものであったのか。次節では、他作品における「鳩」の様相を調査・検討することで、平安文学史における「家鳩」のイメージがいかなるものであったかを探りたい。それによって「家鳩」の〈回想〉がある意図をもって語り出された、すなわち物語が夕顔追慕という主人公の意識を越えて語らせた、読者に対する一つの仕掛けである可能性を指摘したい。

### 三、「鳩」の文学史

『源氏物語』の動物については、伊東祐子氏が興味深い指摘をしている。<sup>5</sup>『源氏物語』に描かれた動物は三〇種類にわたり、そのうち二五種は和歌の素材として、また四種は漢詩文を典拠とするという指摘である。事件の夜に光源氏が鳴き声を聞いた梟も『白氏文集』巻一「凶宅」の「安多大宅。列在街西東。往往朱門内。房廊相封空。梟鳴松桂枝。狐藏蘭菊叢。」という一節が背景にあるとされ、漢詩グループに含まれる。この一節を踏まえることで、「なにがしの院」がいかに人気がなく荒廃した様子であったかが効果的に示されることになる。<sup>7</sup>伊東氏によれば、三〇種類の動物のなかで「家鳩」だけは和歌の材としても漢詩の材としても見出し得ないという。伊東氏はその後、和歌に詠まれた鳥という方向に論を進めていくため、「家鳩」についてはこれ以上言及してはいないが、確かに、次に示すように和歌において「鳩」の姿が登場するのは<sup>13</sup>『新古今和歌集』西行法師の和歌である。ここでは「友よぶ声のすぎき夕暮れ」と、壮絶な寂しさを呼び起こすものとして「鳩」の鳴き声を捉えていたことがうかがえる。

## ⑪ 『古事記』

天飛む 軽の嬢子 いた泣かば 人知りぬべし 波佐の山の鳩の 下泣きに泣く

## ⑫ 『古今和歌六帖』(第二帖・「野」)

われをあきとふる露なれば山の鳩のの鳴きこそわたれ君まつのに

## ⑬ 『新古今和歌集』(卷一七・雑歌中・一六七六・西行法師)

古畑のそは(岨)の立木にゐる鳩のの友よぶ声のすこき夕暮れ

もつとも、厳密にいえばそれまで「鳩」自体が詠まれなかったわけではなく、「山の鳩」「山鳩」は登場する。しかしそれも⑪⑫のようにわずかな例であり、⑪では「いた(甚)泣かば」と激しい泣き方と対比する形で「下泣きに泣く」すなわち声をしよせて泣く様が「山の鳩」になぞらえられ、⑫では「山鳩」の鳴き続ける様子が詠まれている。そして、いずれも邸とは関係なく、誰かをおびえさせるような恐ろしい存在としては詠み込まれていない。同様のことは漢詩文にも言えよう。

## ⑭ 『白氏文集』(卷六「遊悟真寺詩」)

感彼雲外の。群飛千翩翮。

## ⑮ 同(卷一五「重傷小女子」)

傷心自歎の。巢拙。長墮春雛養不成。

## ⑯ 同(卷六九「春日閑居三首」)

是時三月半。花落庭蕪緑。舍上晨の鳩鳴。



⑰同（巻六九「遇物感興因示子弟」）

〔龜〕性愚且善。〔鳩〕心鈍無惡。

⑱『経国集』（巻一四「七言和海和尚秋日観神泉苑之作一首」滋貞主）

小嶺登攀頻見〔鷺〕。暗林沸入欲驚〔鳩〕。

⑲『田氏家集』（巻一「七年歳旦立春」）

〔鳩〕飛使放東風去。〔鷺〕出先登南樹遷。

『源氏物語』にもっとも多く引用される中国の漢詩文集、『白氏文集』における「鳩」の用例は極めて少なく、右に挙げた⑭のように「鴿」の文字を用いたものは一例のみ。しかも⑭は字は同じだが、外を群れになって飛ぶという表現から特に邸の鳩を描いたものではないことがわかる。⑮は幼くして失った娘を思い嘆く詩で、「鳩が巢を作るのを得意としない」ことを例にして、自分が子供を育てきれなかったことを悲しむものとなっている。⑯は春のうららかな日に屋根の上で鳴く鳩を取り上げ、それによってまどろみの朝を表現している。⑰はどのような人間になるべきかという話題のなかで、亀と鳩を例にして、だまされやすく弱い性格ではないかと諭すものである。日本の漢詩においても、鳩は好んで用いられる素材ではなかったようだ。数少ない例のうち<sup>11</sup>、⑱では秋の情景の一つとして、鷺と対の形で鳩が描かれ、⑲は春の情景として、鷺と鳩とを対にしている。『白氏文集』と日本の漢詩文とで共通して言えることは、「鳩」が取り上げられること自体少なく、よって人をおびえさせるような「家鳩」、といったモチーフも見出せないということである。同様のことは平安時代における物語にも言える。<sup>12</sup>

・『大鏡』（第六卷・太政大臣道長下）<sup>13</sup>

八幡の放生会には、御馬奉らせたまひしを、御使などにも淨衣をたまはせ、御みづからも清まらせたまひしかばにや、御前近き木に山鳩のかならず居て、引き出づる折に飛び立ちすれば、かひありと、よろこび興ぜさせたまひけり。  
(二九三頁)

そもそも『源氏物語』以前の現存する物語に、生き物としての「鳩」は描かれておらず、『源氏物語』もこの夕顔巻の一例のみである。かろうじて鳩が登場するのは『大鏡』であり、これは「山鳩」だ。『大鏡』において「山鳩」は、八幡様の御加護と関わる形で描き出されており、このように八幡神の使いとしての「山鳩」という姿はこののち『今昔物語集』を経て、軍記物語に継承されていく。<sup>14</sup>

つまり、和歌と漢詩と物語と、そのどれにおいても「家鳩」の姿は見出せなかったことから、『源氏物語』夕顔巻で語り出される、人をおびやかす「家鳩」というのは、文学史においてひどく見慣れない光景であったと言える。だとすれば、夕顔巻でこの挿話が提示されたとき、多くの読者は文学史上稀な鳥の登場に唐突な印象を抱くとともに、なぜ夕顔が「家鳩」に恐れおののかとまず戸惑いを覚えたのではないだろうか。あるいはまた、夕顔の怯えは、あたかも自らの運命を予期するものであったかのように受け止めるにとどまり、そんな夕顔をいとしく思う光源氏の側に立ちながら読み進めたのだと思われる。しかし、「家鳩」の背後に、当時広く流布していた『法華経』の世界を見出したならば、「家鳩」に怯える夕顔を光源氏は気にもとめなかったというエピソードは、また別の意味を帯びてくるのだと考える。

#### 四、『法華経』「譬喩品」と『源氏物語』夕顔巻

『源氏物語』には多くの経典が引用されており、引用頻度の最も高いものとして、『法華経』がある。<sup>15</sup>『法華経』は二八の章からなるが、『源氏物語』はそれぞれを多様に引用しており、本論で注目する『法華経』第三番目の章「譬喩品」も、その例にもれない。たとえば常夏巻には、「瘡、言吃とぞ、大乘誇りたる罪にも、数へたるかし」（常夏③二四五）とあるように、「譬喩品」に見られる、『法華経』の悪口を言ったがための罪という発想（若得為人 諸根暗鈍 矧陋癡 盲聾背偏<sup>16</sup>）<sup>16</sup>）が取り込まれている。また、『源氏物語』作者の時代に『法華経』が人々に深く浸透していたことは、度重なる法華八講の催しや、次にあげる和歌からもうかがえる。

ア 『赤染衛門集』 四二九 「譬喩品」

もゆる火の家をいでてぞさとりぬるみつの車はひとつなりけり

イ 『公任集』 二六一 「譬喩品」

かどでは三つの車と聞きしかど果は思ひの外にぞ有りける

ウ 『発心和歌集』 二七 「譬喩品」

羊車鹿車、大牛之車、今在門外、汝等出来

あまたありと門をば聞きて出でしかどひとつの法の車なりけり

ウの和歌の題詞には「譬喩品」の文言自体が取り入れられている。これらの和歌には、ア「もゆる火の家」、イ「三つの車」、エ「法の車」という表現が見出せる。これは「法華七喩」の一つ「三車火宅」を詠んだもので

ある。「法華七喻」とは、法華経において主に釈迦が行った、譬喩を用いた七つの代表的な説教であり、その一つに三車火宅がある。それは次のようなものだ。

大長者の邸の中で子供達が遊びに耽っていた。火災が起きたが、子供達は遊びに夢中で外に出ようとしな  
い。長者が、彼らの欲していた三つの車が外にあるからそれで遊べと告げると、子供達は外に出て猛火を  
逃れることができた。その後長者は三つの車ではなく、さらに立派な車をそれぞれに与えた。

先ほど挙げた和歌はこのたとえ話を詠み込んでいるのであり、「譬喩品」のなかでも特に印象に残る箇所であ  
ったことがわかる。そして、夕顔巻における光源氏の回想もこのたとえ話と関わっているのではないか。

『源氏物語』において光源氏は荒れ果てた「ながしの院」に夕顔を連れて行ったが、「譬喩品」に登場する、  
子供たちがいる邸もまた次に挙げるようにひどく荒廃しており、興味深いのは、その邸にはモノ達の存在が語  
られていることだ。

・ 譬如長者 有一大宅 其宅久故 而復頓弊 堂舍高危 柱根摧朽 梁棟傾斜 基陛頹毀 墻壁圯坼 泥塗  
褻落 覆苫乱墜 椽栢差脱 周障屈曲 雜穢充遍

（譬えば長者に一の大きな宅有るが如し その宅は久しく故（ふ）りてまた 頓（やぶ）れ弊（やぶ）る 堂舎は  
高く危く柱の根は摧（くだ）け朽ち 梁・棟は傾き斜（ゆが）み 基陛は頹（くず）れ毀（やぶ）る 墻・壁は  
圯（やぶ）れ坼（さ）け 泥塗は褻（は）げ落ち 覆える苫は乱れ墜ち 椽・栢は差（たが）い脱け 周（めぐ）  
れる障（かき）は屈曲して 雜穢は充遍す）

・夜叉餓鬼 諸悪鳥獸 飢急四向 窺看窓牖 如是諸難 恐畏無量

〈夜叉と餓鬼と諸の悪の鳥獸とは飢、急にして四に向い窓牖を窺い見る かくの如き諸の難ありて 恐畏すること 無量なり〉

・鵝梟 鵝鷲 烏鵲鳩鴿

〈とび、ふくろう、くまたか、わし、からす、かささぎ、やまばと、いえばと〉

「夜叉と餓鬼と諸の悪の鳥獸とは飢、急にして四に向い窓牖（まど）を窺い見る」とあるように、邸の中には子供達とともに、飢えた「夜叉餓鬼 諸悪鳥獸」がおり、窓から外の四方を眺めているという。注目したいのは、その諸悪鳥獸の名が次のように具体的に列挙されている点である。複数の鳥の中には、「ふくろう」とともに「いえばと」の存在が確認され、この鳥は『法華経』では「譬喩品」にしか出てこない。荒れ果て、「恐畏無量」という恐ろしさの満ちあふれた邸のなかで「悪」と表現される『法華経』の「家鳩」は、夕顔卷の「なにがしの院」で夕顔だけが怯え、光源氏は意に介さなかったという「家鳩」と重なり合う面を持っているのではないか。

ようするに、事件ののち光源氏の回想によって、あの場所には梟だけでなく「家鳩」もいたと明かされることで、荒廢した邸として描かれていた「なにがしの院」をさらに、「譬喩品」の諸悪鳥獸のいる邸”として捉え返すことが可能となるのではないかと考える。そして、このような視点から『源氏物語』夕顔卷におけるあの事件を振り返ったとき、そこに「邸」と「鳥」のみならず「火」のモチーフもまた共通して見出せることは興味深い。

このかう申す者は、滝口なりければ、弓弦いとつきづきしくうち 鳴らして、「火危し」と言ふ言ふ、預りが曹司の方に去ぬなり。

(夕顔①一六六～一六七頁)

「物に襲はるる心地」(同一六四頁)で目覚め、周囲の灯火が消えていることに気づいた光源氏は紙燭を持ってくるよう、この院の「預り」の子に命じる。また先に③で確認したように、魔除けのために隨身に「弦打ちして絶えず声づく」(同一六五頁)らせるようさらに彼に命じるのだが、注意したいのは、その彼が弓の弦を鳴らすとともに「火危し」(同一六五頁)と声を張ることだろう。火が一切ともっておらず周囲は暗闇だからこそ紙燭を取りに行く「預り」の子の呼びかけが「火危し」―火の用心―であったというのは意味深長である。この若者については「このかう申す者は、滝口なりければ」とことわりがあり、「滝口」という表現は『源氏物語』で唯一ここにのみ見られる語であることをおさえておきたい。火の気の全くない暗闇のなかで「火危し」と叫ぶ奇妙さは、「滝口なりければ」という一節があるゆえに際立たないのである。しかし『法華経』をふまえたとき、「火危し」という発言は、「譬喩品」の邸で火事が起きることと響き合うのであり、その点を見逃してはならないだろう。

そのうえで『法華経』「譬喩品」という観点から夕顔巻を眺めたとき、看過しがたいのは光源氏と子供達との重なりである。「譬喩品」では、夢中になって遊びに耽る子供達の様子が、「稚小無知にして歓娛(かんご)に楽著(ぎょうぢやく)せり」「嬉戯(きげ)に枕漚(おほ)れ」「嬉戯(きげ)に貪楽(どんぎょう)せり」といった表現でくりかえし語られている。彼らは邸にいる〈悪〉の存在に全く気づいていない。こうした姿に通ずると思われるのが、夕顔との恋にのめり込む光源氏の姿である。

・あやしきまで、今朝のほど昼間の隔てもおぼつかなくなど思ひわづらはれたまへば、(略) いづこにいとかうしもとまる心ぞとかへすがへす思す。  
(同一五二〜一五三)

・いと忍びがたく苦しきまで思ほえたまへば、なほ誰となくて二条院に迎へてん、もし聞こえありて、便なかるべきことなりとも、さるべきにこそは、わが心ながら、いとかく人にしむことはなきをいかなる契りにかはありけん、など思ほしよる。  
(同一五四頁)

傍線部の表現からは、光源氏自身が戸惑いを覚えるほど夕顔に夢中になっている様子が確認できる。「家鳩」のエピソードも語るように、「なにがしの院」においても怯えるのは夕顔だけで、光源氏はひたすら夕顔とのひとときを味わいつくそうとしていた。彼が恐れおののくのは夕顔が取り殺されたあとであり、そこにおいてようやく恐怖をかきたてる様々な音が光源氏の耳に入ってくるようになる。それ以前から「家鳩」の鳴き声におびえ、その存在に気づいていた夕顔が描かれることで、一向に頓着せず恋に惑乱していた光源氏の対照的な姿が際立つことを見過ごしてはならないと考える。それでは、光源氏と重なりうる子供たちとは、「譬喩品」においてどのような意味を担っているのだろうか。

「譬喩品」では、三車火宅のたとえ話をしたあと、その意図について述べる箇所がある。

・衆聖中尊 世間之父 一切衆生 皆是吾子 深著世樂 無有慧心 三界無安  
猶如火宅 衆苦充滿 甚可怖畏 常有生老 病死憂患 如是等火 熾然不息 (略)  
是以方便 為説三乘 令諸衆生 知三界苦 開示演説 出世間道

〈衆聖の中の尊にして世間の父なり 一切衆生は皆、是れ吾が子なるに 深く世の樂に著して慧心有ること無し三

界は安きこと無く、猶火宅の如し。衆苦は充滿して、甚だ怖畏すべく、常に生・老・病・死の憂患有りて、かくの如き等の火は、熾然として息まざるなり（略）ここを以て方便して、ために三乗を説きて、諸の衆生をして、三界の苦を知らしめ、出世間の道を、開示し演説するなり」

「三界は安きこと無く、猶火宅の如し」「常に生・老・病・死の憂患有りて」「かくの如き等の火は、熾然として息（や）まざるなり」とあるように、「火宅」―火の燃えさかる邸―とは、安らぐことのない苦しみや煩惱に満ちた「三界」、一切衆生の生きる世界をさしている。邸におきた火災は「かくの如き等の火」と表現され、火とは生老病死がもたらす苦悩や不安の象徴であることがわかる。そしてここで何より見過ごせないのは、邸にいる子供達が何を譬喩したものかということだろう。一行目で「衆聖の中の尊にして世間の父なり、一切衆生は皆、是れ吾が子なるに」と明示されるように、この喩え話における大長者・父とは釈迦のことであり、子供達とは一切衆生、苦悩と迷妄のなかにいる人間を表しているのだ。よって『源氏物語』において、梟や家鳩の鳴く「なにがしの院」で夕顔との恋におぼれ、最終的にそこで彼女の命を奪われて苦悩に沈む光源氏の姿は、諸悪鳥獸のいる邸で、それらに無頓着なまま遊びに耽り、火事に出会う子供達と同じであり、すなわちこの世界において煩惱や不安を抱える衆生の姿を体現したものと、として捉えられるのである。

そのうえで、『法華経』にはあつた長者の呼びかけが、『源氏物語』にはないことを見逃してはならないだろう。先に挙げた最後の行に「ここを以て方便して、ために三乗を説きて」とあるように、長者が子供たちに呼びかける三つの車とは、「三乗」つまり、惑う衆生を三界から抜け出させ、悟りへと導くための、釈迦の三種類の教えを指している。外へ出てきた子供達にまた別の一つの車を与えるのは、悟りへ導く唯一の教え・一乗の存在を示すとともに、三乗も究極的には一乗に帰するものであることを表しているという。だが夕顔巻にそう



した長者の働きかけにあたるものではなく、釈迦の教えにすがろうと発心する光源氏の姿も見出せない。夕顔物語における光源氏は、悟りの道を求めたり手にすることはなく、あくまで苦悩と迷いのただ中にいる「一切衆生」として描かれているといえる。

むろん、惑う光源氏のありようは、今後の彼の人生を見通したとき、決して珍しいものではない。ただおさえておきたいのは、この夕顔物語が、どのような主人公の姿が語られるなかにおかれているのか、ということだろう。次に挙げる帚木巻冒頭と夕顔巻巻末からわかるように、いわゆる帚木三帖における夕顔物語は、「光源氏」の知られざる「忍びたまへける隠ろへごと」の一つである。

・光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人の言ひさがなさよ。  
(帚木①五三頁)

・かやうのくだくだしきことは、あながに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくてみなもらしとどめたるを、なご帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならずものほめがちなると、作り事めきてとりなす人もものしまひければなん、あまりもの言ひさがなき罪避りどころなく。  
(夕顔①一九五―一九六頁)

それでは、ここでいう光輝く「光る源氏」とは、具体的にどのような存在なのか。それが明瞭に示されるのは、夕顔巻の次に置かれた若紫巻だと考える。というのも、「光る源氏」という呼称は全部で五例あり、この帚木巻冒頭で初めて用いられ、次に見出せるのが若紫巻だからである<sup>17</sup>。残りの三例は、玉鬘・紅梅・竹河と、ずいぶんあとになってから、いずれも若き頃の光源氏について語られる際に使用されるものである。よって、帚

本三帖が「隠ろへごと」を持ち出すことによって相対化しようとする「光る源氏」の姿、つまり賛美される主人公像の内実の一端を、その若紫巻に求めることは可能だろう。次に該当場面を挙げる。

・「この世にののしりたまふ光る源氏、かかるついでに見たてまつりたまはんや。世を棄てたる法師の心地にも、いみじう世の愁へ忘れ、齢のぶる人の御ありさまなり。」  
(若紫①二〇九頁)

・優曇華の花持ち得たる心地して深山桜に目こそうつらね

と聞こえたまへば、ほほ笑みて、「時ありて一たび開くなるはかたかなるものを」とのたまふ。

(同二二頁)

いずれも光源氏による少女紫の上垣間見という有名な場面の前後にあたる。右の用例では、紫の上の大叔父である僧都が、「光る源氏」を拝見したいものだ、「世を棄てたる法師の心地にも……」と、仏教に帰依した者たちの心をも和らげるような存在として光源氏があることを語っている。さらに左の用例の和歌では光源氏が、「優曇華の花」に喩えられており、彼が釈迦や転輪聖王といった、悟りの象徴ともいべき存在になぞらえられていることがわかる。ひるがえって夕顔物語では、光に対する影のようにまさに対をなすような姿が語られたことになる。もつともこうした姿の一端は、光の面を語る若紫巻にも見出せると考えられ、物語が進展するにつれて、次第にせり上がっていくものである、と言えるだろう。

つまるところ「家鳩」のエピソードは、若き日の光源氏のもう一つの側面を、『法華経』の世界から照らし直すことを読者に促すものだったのではないか。事件が終わりを迎えて過去を回想する場面になってから「家鳩」の出来事が付加されるのは、悲恋物語としてまずは捉えられる夕顔との死別という体験が、物語においてさら

なる意味を持つことを示すためであったと考える。すなわちこの体験を改めて『法華経』の三車火宅の世界と結びつけ捉え直す機会がもうけられたのではないか。光源氏と「譬喩品」三車火宅の子供達との重なりを通して浮かび上がってくるのは、光源氏の、悟りとはほど遠い一切衆生としての側面である。それは、続く若紫巻に見られる、聖なる存在としてあがめ奉られるような「光る源氏」とは大きくかけ離れた、すなわち「隠ろへごと」に見合う姿であった。光源氏が、やがては救いを必要とする、惑う存在でもあることを、夕顔物語は一方で伝えているのではないだろうか。

### おわりに

光源氏の〈回想〉に唐突に登場する、夕顔をおびえさせたという「家鳩」は、『源氏物語』にはこの場面にも見られ、和歌・漢詩・物語・日記といった平安文学作品においても姿を現さない、平安文学史上きわめて稀な鳥である。八幡神の御加護と関わる「山鳩」は他の物語に見られるが、「家鳩」となると一切姿を見出せない。だが、当時広く浸透していた『法華経』の「譬喩品」にはその登場が確認できるのであり、読者が「家鳩」の挿話の背後に『法華経』「譬喩品」の三車火宅の世界を見出したならば、その重なりと差異を通して、夕顔と死別する光源氏の姿を改めて捉え直し位置づけることが可能となる。梟のみならず家鳩もいる〈諸悪鳥獣〉の邸で夕顔を失った光源氏の姿は、『法華経』における「火宅」の子供たち―すなわち迷妄のなかにいる一切衆生―と重なるのであり、それは賛美される「光る源氏」のもう一つの側面なのである。

ここで見過ごせないのは、こうした〈回想〉が実は巻末においても一つ見出せることである。右近と語りうなかで「なにがしの院」の「家鳩」の鳴き声を〈回想〉した光源氏は、続けて五条の陋屋すなわち夕顔の隠

れ住まう粗末な家で過ごした時のことを振り返る。

かやうにておはせましかばと思ふにも胸ふたがりておほゆ。耳かしがましかりし砧の音を思し出づるさへ恋しくて、「正に長き夜」とうち誦じて臥したまへり。  
(夕顔①一八九頁)

右近の前に語らいつつ、夕顔が生きて今こうしていてくれたらと思わず願ってしまう光源氏は、二人でともに朝を迎えた粗末な家でのひとときを「耳かしがましかりし砧の音」という形で思い出す。「なにがしの院」の思い出と同じく、夕顔の陋屋での思い出も音にまつわるものであり、ここでも音の記憶と実際の叙述とにずれが生じていることに注目したい。というのも、光源氏がかつて「あな耳かしがまし」と聞いたのは「ごほごほと鳴神よりもおどろおどろしく、踏みとどろかす唐臼の音」(同一五六頁)だったのであり、「砧の音」はむしろ「白栲の衣うつ砧の音も、かすかに、こなたかなた聞きわたされ」(同)というように遠く「かすかに」響いていたのであった。しかし彼は、「砧の音」こそが「かしがまし」きものであったと思い出している。この点について天野紀代子氏は、光源氏が続けて「正に長き夜」と口ずさんだこととの関連性に着目し、その一節をおさめる『白氏文集』巻一九「聞夜砧」において「砧の音」は、遠地に赴いた夫を思い、待ちわびる妻が夜通し掃つ衣の音であることから、「砧の音」が「かしがまし」く耳に残るものとして前面に押し出されるのは、夕顔像の捉え返しがなされたことを意味しているのだと指摘する。<sup>19</sup> 右近の語りを通じて、夕顔が単に従順な女ではなく愁いを抱えた「思婦」でもあったことが明示されるのであり、「作者は、以前には陋巷の描写として添えた砧の音を、改めて物思う妻を象徴する響きとして提出した」と天野氏は述べており、<sup>20</sup> 汲むべき見解だと思われる。つまるところ、実際の叙述と異なる形でなされた音の〈回想〉は、「物思う妻」として夕顔像を捉え直す働きを担っているのである。

このように、夕顔の粗末なあばら屋も「なにがしの院」も、どちらも音で満ちあふれており、しかし、その思い出がたどられるとき、当初叙述された音がそのまま再現されることはないのである。夕顔の陋屋で「かすかに」聞こえた「砧の音」が「かしがまし」きものとして〈回想〉されるのは、『白氏文集』を踏まえつつ、さらなる夕顔像の提示をはかるためであった。そしてまた、「なにがしの院」での語られなかった「家鳩」の鳴き声が〈回想〉において示されるのは、『法華経』と重ねること、他の巻では「光る源氏」とあがめ奉られる主人公のもう一つの姿を浮かび上がらせるためなのではないか。夕顔との恋物語の綴じ目における〈回想〉は、人物像を捉え直すべく仕掛けられたものである。

注

- 1 引用本文は『新編日本古典文学全集 源氏物語』①～⑥（小学館、一九九四～一九九八）（以下、新全集と称する）に拠る。傍線等は引用者による。
- 2 いと古めきたる御けはひ、咳がちにおはす。このかみにおはすれど、故大殿の宮はあらまほしく古りがたき御ありさまなるを、もて離れ、声ふつつかにこちこちしくおぼえたまへるもさる方なり。（朝顔②四六九～四七〇頁）
- 3 各註釈の記載を次に挙げる。  
太い声で（新潮日本古典集成） 太っぽい声で（新日本古典文学大系）  
太く不細工な（新編日本古典文学全集） ぶきつちよに（源氏物語評釈）
- 4 『源氏物語』夕顔卷の〈音〉に關しては、石田穰二「源氏物語における聴覚的印象」（『源氏物語論集』〈桜楓社、一九七一〉）所収。初出は、『国語と国文学』二六一～二、一九四九・一二であり、これを改稿が一部言及している。
- 5 伊東祐子「源氏物語の「鳥」考—和歌との関わりから—」（『古典和歌論叢』明治書院、一九八八）
- 6 引用は、『白氏文集』（京都大学人文科学研究所、一九七二）および『群書類従』（続群書類従完成会、一九八〇）に拠る。

7 新全集①四四五頁。この箇所に関しては、中西進「引喩と暗喩―『源氏物語』における白氏文集、「凶宅」など」(『源氏物語と白楽天』(岩波書店、一九九七)所収。初出は、『日本研究』一、一九八九・五)や、新間一美「源氏物語の表現と漢詩文―白居易の諷諭詩と夕顔・六条御息所―」(『源氏物語と白居易の文学』(和泉書院、二〇〇三)所収。初出は、『講座平安文学論究』九(風間書房、一九九三・一一)に詳しい言及がある。なお新間氏は、『白氏文集』巻二「傷宅」が夕顔の陋屋に、「凶宅」が「なにがしの院」にそれぞれ踏まえられていることを述べたうえで、その連なりにも注目している。

8 このほか『新編国歌大観』におさめられた平安期成立までの勅撰集・私家集・私撰集には「鳩」「鶴」は見出せなかった。

9 『日本書紀』にも同様の歌が見られる。引用本文は、『新潮日本古典集成 古事記』(新潮社、一九七九)に拠る。

10 引用は『新編国歌大観』(角川書店、一九八三〜一九九二)に拠る。以下、和歌の引用はすべてこれに同じ。

11 以下の作品には「鳩」「鶴」は見出せなかった。  
『懷風藻』『凌雲集』『文華秀麗集』『性靈集』『都氏文集』『菅家後集』『扶桑集』『本朝麗藻』『和漢朗詠集』『本朝文粹』『法性寺関白御集』

この他、次のような用例も見られた。

・『経国集』(野岑守「五言帰林独臥寄高雄寺空海上人一首」)  
護戒鷺得性 依慈鴈知時

・『菅家文章』巻四(「北溟章」述曰、鯤爲鵬鳥、自北徂南。蛭與鷺鳩咲其宏大。…)

・『菅家文章』巻七(「省試當時瑞物贊六首」禮部王獻白鳩第二。)

鳩呈瑞色 質已如霜 羽毛皎、日德分光

・『江吏部集』巻二「七言、初冬、於左親衛藤原將亭、同賦煖寒飲酒」(以盃爲韻并序)

并百家而鳩集。匡衡進則不能趨朝市

・『本朝無題詩』(藤原宗光「山寺(終日長樂寺即事)」)

相携鳩杖秋遊寺 心靜自然忘毀譽

- 「本朝無題詩」にあげた「鳩杖」は生き物ではなく老人の使う「杖」であり、高齢の喩えとしてこの他にも多く用いられており、用例からは外したい。また『菅家文章』巻四の「鴛鳩」は「こぼと」を意味する。
- 12 以下の作品（日記含む）には「鳩」「鴛」は見出せなかった。
- 『出雲国風土記』『播磨国風土記』『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『落窪物語』『宇津保物語』（ただし「鳩」を造形した贈り物の用例あり）『栄花物語』『堤中納言物語』『土佐日記』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』
- 『紫式部日記』『更級日記』『枕草子』
- 13 引用は、『新編日本古典文学全集 大鏡』（小学館、一九九六）に拠る。
- 14 『平家物語』や『太平記』など。
- 15 高木宗監「仏教故事の母体たる経典―源氏物語の先行文献としての仏教経典―」（『源氏物語における仏教故事の研究』桜楓社、一九八〇）は、「源氏物語に引用されている経典は、概観すると、引用頻度の最も高い「法華経」を始めて、大体六十余种近くに乗っている。」と指摘する。
- 16 引用は『法華経』上中下（岩波文庫、一九九一）に拠る。
- 17 河添房江「光る君の命名伝承をめぐって」（『源氏物語表現史 喩と王権の位相』〈翰林書房、一九九八〉、初出は、『中古文学』四〇、一九八七・一一）
- 18 新全集①二二〇頁の頭注一〇は、「優曇華」について、「三千年に一度開花し、その時は、仏陀または転輪聖王（正しい法をもって全世界を統治するという理想的な王者）が世に出現するという霊瑞」と述べる。
- 19 天野紀代子「砧の女と梟の院―夕顔卷の仕掛け―」（『和漢比較文学叢書十二 源氏物語と漢文学』汲古書院、一九九三、八八頁）
- 20 天野紀代子氏前掲論文「砧の女と梟の院―夕顔卷の仕掛け―」（八六頁）